鹿児島国際大学でフィールドワーク等を経験した学生が成長する様子や地域連携事業を紹介します

IUK 産学官地域連携ニューズレター Vol.38

2024（令和6）年1月31日発行

鹿児島市に政策をプレゼンテーション

地域連携事業

鹿児島市内４大学の学生 10 名が８月末から７日間の鹿児島市主催「まちづくり未来の担い手育成事業」に参加し、本学からは４名の学生が参加しました。

他大学の学生と一緒に、鹿児島市が提示した「若い世代の地元定着事業の提案」をテーマに、フィールドワークや先進事例研究、課題解決策の提言作成に取り組みました。

最終日の９月 11 日には、若い世代による転出増加の課題解決のため、地元就職やＵターン就職を促す政策について市長に提言し、座談会では市長と意見交換を行いました。

参加した学生からは、「フィールドワークでは、実際に話を聞くことにより現状把握ができ、アイディアが浮かび、自分の足で聞きに行くことの大切さに気づきました。」「他大学の方々との交流やプレゼンテーションを通して『物事を客観的に見て把握する力』『コミュニケーション能力』が高まったと思います。」との感想がありました。

よかど鹿児島のにぎわいを考える

地域連携事業

11 月 18 日、「マーケティングアイデアソン」（主催：株式会社鹿児島銀行）の最終発表会が「よかど鹿児島」で行われました。今年度は８月から 11 月にかけて５日間のプログラムで行われ、県内の大学、短大、高専から応募した 16 名の学生たちが参加し、本学からは４名の学生が参加しました。全体で４つのチームが、商業施設『よかど鹿児島』がもっと若者に愛される場所になるために、施設運営スタッフやテナント入居者との対話や調査を基に企画と戦略を考え、課題解決に向けた提案を行いました。

最終発表会では、本学の山口さくらさん（国際文化学科３年）と産業能率大学の学生の ２ 名のチームが最優秀賞に選ばれました。年配者向けと若者をターゲットとした面を分けてデザインする１枚の案内マップを提案し、緻密なマーケティングに基づいた詳細な施設のユーザー像を設定したことが評価されての選出でした。更に、鹿児島銀行でこの提案の実現に向けた活動を引き続き行うこととなりました。山口さんは、「私たちが企画した『よかど鹿児島ップ』をかぎんさんと懸命に作り上げていくので、よかど鹿児島に行く際はマップを手に取って楽しんでください !! 」と今後の抱負を語っています。

主催の鹿児島銀行からは、「どのチームも学校での学びを生かしており期待以上のレベルだった。今後の企画のためのヒントや示唆に富んだ内容だった。」と評価されました。参加した本学の学生からは、「本当に楽しく取り組めていい経験になった。」、「ゼミの後輩たちにも参加するように呼び掛けたい。」などの感想が聞かれました。

発行
鹿児島国際大学
産学官地域連携センター
〒891-0197　鹿児島市坂之上8-34-1
TEL 099-263-0686

薩摩川内市東郷町で就農体験

児童学科　脇ゼミ

7月29日、脇ゼミ3・4年生は就農体験を通して生産活動の大変さや生産者の思い等に触れ、今後のゼミ活動に活かすことを目的に、東郷町の「ぶどう園」での収穫作業及び「きんかん園」での摘果作業を体験しました。

炎天下の中、汗をかきながらの作業となりましたが、作業後の生産者の方々との意見交換では、生産活動を高めることのみならず地域の活性化にも繋げていきたいという思いに触れることができました。

今回の体験を通してゼミ生たちは「地道な生産活動の積み重ねが、収穫の喜びに繋がることを体験できた。また、生産者の方々の地域に対する郷土愛、愛着を肌で感じることができた」と語りました。

近代日本の産業革命遺産をめぐる

経済学科　西原ゼミ

11月25日、西原ゼミは尚古集成館の別館および反射炉跡・ガラス工場・異人館と関吉の河口堰にてフィールドワークを実施しました。

世界遺産に指定された反射炉跡、関吉の河口堰、寺山の炭窯跡は、薩摩が日本近代化の出発点であったことを如実に示す証拠＝遺産であり、この先達の偉業を知り、現代に繋ぐというのが、このフィールドワークの趣旨です。

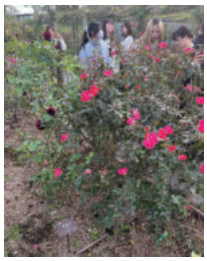
島津斉彬の集成館事業は、日本の植民地化を防ぐため、海軍を強化すると同時に、その基礎となる産業を興し、産業革命の母国である英国に匹敵する産業都市・工場群を幕末の薩摩の地につくるというものでした。当時、薩摩は日本のトップランナーであり、これなしに日本の近代化と産業革命は起こりえなかったことに一同驚きを隠せなかった様子でした。

大隅半島でフィールドワーク

国際文化学科　マクマレイゼミ

マクマレイゼミは、12月6日に「地域の特性を活かした季語を発見し、大隅地域で可能な地域活性化をビジョン化する」をテーマにフィールドワークを行いました。

ゼミ生たちは、垂水市の千本イチョウにて大隅の魅力を引き出す英語写真俳句作成に向けたインスピレーションを紡ぎました。歴史学習では、鹿屋航空基地史料館にて写真や文献を通じて太平洋戦争当時から現代に至るまでの変遷を学びました。



かのやばら園では、冬季期間でも鑑賞できる100種類もの温室のバラから連想できる季語を探し、高貴さを活かした以下の俳句を詠みました。

Eyes closed　Revealing its secrets　Scent of the rose garden

和訳：「目を閉じて　秘密を暴く　バラの香り」　作：国際文化学科3年 加藤 慶和

これからも、冬季でも可能な大隅ツーリズムのあり方を模索していきたいと考えています。

（国際文化学科4年 原 有輝）

焼酎の製造過程および現状について学ぶ

経済学科　平出ゼミ

11月4日、平出ゼミの2年生がいちき串木野市にある濵田酒造の伝兵衛蔵を訪問し、焼酎の製造過程および焼酎を取り巻く現状について学びを深めました。

伝兵衛蔵の見学では、濵田酒造の歴史やかつて使われていた機械の説明から始まり、現在の製造過程や焼酎をどのようにブレンドして製品化するかなど、詳しい説明をしていただきました。学生からは「ライチの香りのする焼酎をどのように作ったのか」、「現在の焼酎の輸出状況は？」、「海外観光客は見学にどのくらい来るのか？」といった質問が上がりました。

濵田酒造では、輸出専用の製品があったり、海外観光客の見学も増えてきたりと、これからさらに海外市場を開拓されていくと思うので、ゼミ生にも今回のフィールドワークで得た経験を踏まえて、海外市場も意識しながら自分たちの研究を進めていってほしいと考えており、今学期の終わりにゼミ内で発表会を行う予定です。